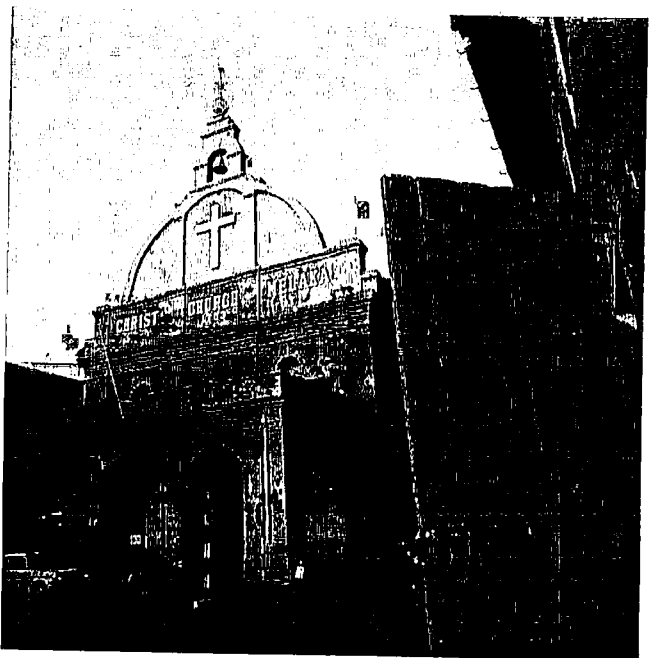


世界は平和」(<http://www3.justnet.ne.jp/tanahara/mouri03.html>) を参照 (現在は閉鎖) <http://www009.upp.so-net.ne.jp/kobako/mouri03.html>)

http://www009.upp.so-net.ne.jp/kobako/mouri_01.html 等々 http://www009.upp.so-net.ne.jp/kobako/mouri_02.html

(31) 前掲URLを参照)この講演を批判する公開質問状は、



対談

仏教を開く アジアの女性たち

かわなみ ひなこ
川並宏子

かわはし のりこ
〈司会〉川橋範子

まじま じまほこ
馬島浄圭



司会 本日は、川並宏子さんと馬島浄圭さんにお越しいただきました。

今回の特集テーマには、「スリランカやミャンマーやチベットは仏教の伝統を分かち合っている点でひととき親近感が強い国々だが、自然災害とともに政治的な難問を抱える地域でもある。その政治的な難問に宗教は深く関わっている」と書かれています。お二人はともにミャンマー（ビルマ）研究の専門家であり活動家であらうしやいます。ミャンマー（ビルマ）では、二〇〇七年九月の軍事政権による弾圧と反政府デモ、それから今年五月二日から三日にかけてのサイクロンによる被害、これは一三万人もの死者が出たということですから、こういう大変な事件が起こっています。

ところが、その記憶が日本では風化しつつあるのではないかと思います。チベットをはじめ、アジアでいろいろなことが起こっているために、ミャンマー（ビルマ）の事件が持つているマグニチュードが段々薄れて来てしまっているのではないかと、という危機感のある今日、現場をよくご存知で、ミャンマー（ビルマ）の文化と宗教に

長年にわたり関わっていらっしゃるお二人をお招きしての対談ということで大変期待を持っています。

また、特集テーマには「仏教教団における女性の地位」という難問も、アジア共通の問題として取り組まれていくことになるだろう」ともあります。お二人とも女性であるということ、フェミニズムやジェンダーの問題に口ごから関わっていらっしゃるということで、その点についていろいろとお話が聞けるのではないかと考えております。

川並宏子さんはロンドン大学で宗教学を専攻され、現在、ランカスター大学の宗教学部の専任講師をおつとめです。専門は宗教学と比較仏教学。この二〇年間、ミャンマー（ビルマ）で教学に励む学僧、尼僧と男僧両方に関わる研究を進めていらっしゃいます。一九八六年にはご自身も剃髪されて尼僧さんとなり、一六ヶ月に及ぶ尼僧院での生活も体験されています。

馬島浄圭さんは、名古屋市にある妙本寺さんという日蓮宗のお寺でお育ちになり、立正大学で仏教学を専攻され、現在はご住職をおつとめです。お師匠さんも尼僧さ

んですね。馬島さんは、ミャンマー（ビルマ）の民主化運動の支援活動に一五年以上にわたって取り組んでおられ、アウン・サン・スーチーさんとも面会なさって中日新聞その他のマスメディアに大きく取り上げられたことでもあります。現在は、ビルマ難民救援センター☆名古屋で中心的な活動をされています。仏教者国際連帯会議 (International Network of Engaged Buddhist) 以下、INEB) の日本会議メンバーとしても著名です。二〇〇三年には、国際宗教研究所ニュースレター39号にも登場されています。

「エンゲイジド・ブディズム」の重い響き

川橋 まず、本特集のテーマにも出て来ますエンゲイジド・ブディズム (engaged Buddhism) について、ご自分の今までの活動と関連させて述べていただきたいと思えます。川並さんにはミャンマー（ビルマ）、スリランカ、タイなどのテラワータ仏教圏におけるエンゲイジ

* 対談中、馬島氏は「ミャンマー」を全て「ビルマ」と発言されました。本対談では併記の形を取らせていただきます。

ド・ブディズムとその中でのご自分の活動について、馬島さんには日本でのINEBやミャンマー（ビルマ）での難民救済活動について述べていただき、その後、お話を広げていきたいと思えます。

川並 最初に、エンゲイジド・ブディズムという言葉の使い方を、もうちょっと掘り下げてみたいと思います。日本でのエンゲイジド・ブディズムという言葉の使い方には、本来の意味とはかけ離れてしまった感じがしています。

この言葉はおそらくベトナム僧侶のティク・ナット・ハンが使い出してから、広く知られるようになった言葉だと思えますが、実際に東南アジアの上座部仏教社会をみますと、昔から僧侶というのは、社会との関わりの中で、出家という非政治的立場でありつつ、実際は政治的な重みを持っていました。人々が政治家の言うことは聞かないけれども、僧侶のあとだつたらついていく、というような指導者の役割を果たしてきたのだと思います。

特に変革するアジアという視点でエンゲイジド・ブディズムという言葉を考えますと、東南アジアの近代史を

振り返る必要があるでしょう。スリランカ、ミャンマー（ビルマ）、そしてカンボジアなどの国々は、侵略する西欧帝国主義の暴力や抑圧に抵抗した長い歴史があるわけですから、僧侶の社会に関わる活動を見ていかないといけないのではないのでしょうか。

スリランカやミャンマー（ビルマ）などの僧侶たちは、インドに留学することも多かったため、当時のインドの独立運動を体験していました。たとえば有名なワルボラ・ラフラーという、*What the Buddha taught?* という本などで非常に有名なスリランカの僧侶もインドに留学して、当時の独立運動での体験をスリランカに持ち帰り、七四年に *The heritage of the Bhikkhu* という本を英語で出版しました。昔からの仏教の伝統の中では、僧侶は出家者ではあるけれども、常に社会とのかかわりを持って、そして *common good*、日本語で言えば大義というような公利のために責任を果たすべきである、そういう本を書いたのです。長い植民地時代においては、僧侶が外に出てくると政治的に問題を起こすので寺に入

って教学に励み瞑想をしておれど、植民地政策の一つとして僧侶と在家者との分断が行われたとラフラーは指摘しています。

そういうことを考えると、出家者である僧侶も、英語で言えば *in the world but not of it*、社会や世俗の中には生きていくけれども実際にはその一員ではない、でもある意味では中立な立場から出家者としての責任を取らなければいけないという考え方もとあるのですね。東南アジアの僧侶の指導者、特に教学をしてきた僧侶のなかには、そういう考え方を持っています。そういう流れを汲んでベトナム戦争中にテイク・ナット・ハンがエンゲイジド・ブディズムを提唱したのだと思います。あと、代表的なエンゲイジド・ブディストとしては、カンボジアのマハーゴサナダという僧侶も、ポルポト政権でインフラが全て壊れてしまった、お寺も全部壊滅、僧侶も殺された、そういうような状況下で、ポルポト政権以降の国づくりに関わっています。

彼らの活動は、ベトナムやカンボジアの深刻な危機的状況のもとでのソーシャリー・エンゲイジドで、権力志

向とか自分の身内を助けるとかではなく、あくまで大義というのか、みんなのために何かをしなければいけないというものであって、やはり、政治と社会の変革の中から出てきた言葉なんです。だから、非常に重い響きを持つ言葉なんです。今、西欧では割合と流行語ですし、日本でも簡単に使いがちですが、そう簡単に使う言葉ではないんです。

馬島 私自身は、タイでのINEBの会議に出席したということが、エンゲイジド・ブディズムという言葉との初めての出会いであり、活動している人との出会いでした。

一九九〇年にタイのスワンモック寺院、タイでのエンゲイジド・ブディズムの精神的支柱の一人と言われているブッタタート（ブッダターサ）師のお寺ですが、そこで第二回のINEBの会議が開かれました。それも会議室を使ったりしないんです。スワンモック寺院はすごく牧歌的で、まわりにあひるや九官鳥がいて、猫や犬がうろうろしている森の中にあるお寺で、その真ん中の境内の地べたに座って、円陣になって話し合う。タイはもち

ろん、ミャンマー（ビルマ）、カンボジア、ネパール、スリランカからもお見えになっていました。

当時は、エンゲイジド・ブディズムなんて私の頭には全くなくて、今思うと、私は日本からのこの行ったおのほりさんみたくでしたね。会議に参加してみても、そういう意識を持った人たちがいるということにびっくりしました。ただただ「あー、アジアで、こういう仏教徒と自覚を持っている人たちがこんな問題で話し合っているんだ」と（笑）。そしてその中に欧米人が結構入っているわけですよ。半分以上は欧米人でした。「これは一体なんなんだ？」という疑問から始まったのが、エンゲイジド・ブディズムという言葉とのかかわりでした。

だから、エンゲイジド・ブディズムが何かと分かかって加わったわけじゃありません。その後、長いことかけて少しずつ分かかっていった。アジアの人たちの活動する姿、お坊さんたちの考え方、あとはいわゆる研究者の使うエンゲイジド・ブディズムという言葉、そういうものを通して学んでいったわけです。それで、十分に咀嚼できていくかどうか分かりませんが、私も日本にいて寺



川並宏子氏

にこもってはいけけない、現状のままではいけないと、人とのつながりを大事にして、自分に何ができるかということを自分なりに考えて歩んできたというのがこの一〇数年ですね。

ミャンマー（ビルマ）にのめりこんでいったのも、私はどちらかという頭で考えて動く方じゃないですから、ミャンマー（ビルマ）がINEBなどで一番印象深く残っていたということですね。INEBの会議で、八八年

当時の民主化運動に参加されて、軍政の弾圧を逃れてきた方たちの中心的な存在だったお坊さんに出会いました。そのお坊さんの姿が忘れられなかったということもあって、ミャンマー（ビルマ）にのめりこんでいったんですね。

川並 今、お話に出てきましたタイのブツダダーサに関して、エンゲイジド・ブディズムという話が東南アジアにおいて何故重要かということ、一つ付け加えさせてください。

上座部の仏教では、出家した僧侶・尼僧たちの生活と世俗の私たちのような結婚して、家庭があり仕事がありという生活は、明確に分かれているわけですね。だから、たとえばミャンマー（ビルマ）のお坊さんなり尼僧さんたちが社会との関わりを持つ活動をしていこうとすると、普通の信者さんからは「なんでそんなことをしているんだ？ あなたはお寺で瞑想をしたり、教学をしたるべきではないか」と非難されるわけですよ。

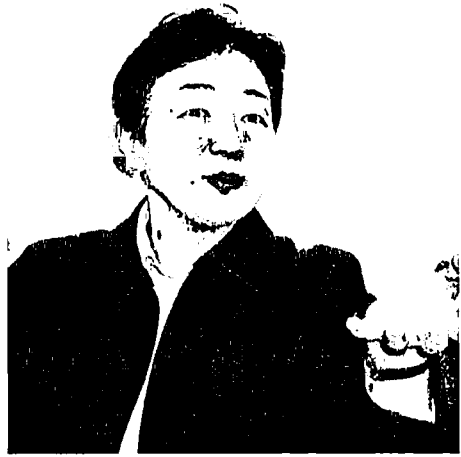
そういった上座部仏教のなかで、スワンモック寺院のブツダダーサは、非常に大きな貢献をされたお坊さんで、

仏教というのは教学をして瞑想して涅槃にたどりつくための修行ではなく、今現在何をやるべきかという責任があると説いたお坊さんでした。それが非常に革新的でした。彼はダーマソーシャリズムという、ダルマと社会主義を結びつけた思想も提唱しました。ブツダダーサは九三年に亡くなりましたが、馬島さんが関わっている運動の創始者スラック・シバラクサ（Sulak Sivaraksa）さんですとか、多くの東南アジアのエンゲイジド・ブディズ

トたちに大きな影響を与えています。ブツダダーサあたりから従来の伝統的な上座部の考え方とはちよつと違った流れが出てきた。その流れの中のエンゲイジド・ブディズムだと思いますね。

馬島 たしかに経済的なものは度外視しないとできませんね。
私はやほり見て見ぬふりはできないから、社会的な問題に関わろうとする。人々の苦しみの中で自分も出来る限りは、手を差し伸べたいというような活動をしますよね。そうすると、今までついている信者さんとか檀家の人からは、「なんで？」とまず疑問を持たれます。「どうしてお坊さんがそんなことをしなくちゃいけないの？」「お坊さんは亡くなった人を弔って供養してあげたいじゃないか」と。特に尼僧さんにはそうしてもらいたい。そう言われるし、言われなくてもそういう空気が伝わってきます。

だから、その点は多分まだ日本でも同じだと思います。僧侶が社会的な問題に関わっていこうとすると、大乗だなんて言いながらも、信徒さん、檀家さんからは、なか



馬島浄圭氏